

## 学校との連携を軸にした児童生徒支援

### 《 概要 》

- 在籍児童生徒数は十数名である。起立性調節障害の児童生徒や、受動的でコミュニケーションを苦手としているなど、友人関係等に課題のある児童生徒が多い。
- 学校との連携を軸に、様々な体験活動と軽運動を通して、児童生徒に自己有用感の醸成を目的としている。
- 学校と連携した児童生徒の学習支援、生活習慣改善支援、地域の教育資源を活用した体験学習、軽スポーツ活動を行っている。

### 《 相談・支援等の実際 》

#### 目標・方向性

- 学校との連携による学習支援
- 様々な体験活動による自己有用感の醸成
- 軽運動による体力の向上

#### 相談・支援、取組等の状況

- ・ 学校からの学習課題や児童生徒が自分の習熟の程度に応じて用意する学習プリント等に対し、個に応じた適切な指導を行っている。
- ・ 学校の定期テスト等は、テスト当日に学校から届き、適応指導教室で受けて、テスト終了後、学校に戻し、採点し、児童生徒の学習状況を確認している。
- ・ 出席状況や様子等をFAXやメール等で学校と情報共有している。
- ・ 市内の施設（図書館、美術館、動物園、児童館、畜産大学等）を効果的に活用することにより、児童生徒の自己決定を促すとともに、多様な感じ方や見方を深めさせている。
- ・ 市内体育施設において軽スポーツ（ミニバレー・バドミントン）を行っている。
- ・ 適応指導教室内の運動スペースでは、他の生徒や指導員と卓球を楽しみ、運動を通じたコミュニケーション能力を高めるとともに体力の向上に努めている。

### 《 取組の成果 》

- 学校との連携を密にし、管理職や学級担任と児童生徒について情報交流することにより、支援の方向性を常に修正しながら指導・支援に当たることができた。
- 地域の教育資源を生かした体験活動を通して、児童生徒の興味の幅を広げ、将来の職業選択等を再考させるとともに、日常の学習意欲の向上に役立てることができた。
- 軽運動を取り入れたことにより、異学年交流や仲間とのコミュニケーションが増え、学習面においても友達と関わって学ぶ楽しさを実感するなど、意欲の向上につながった。

音更町適応指導教室（ふれあい教室）を活用した学校復帰に向けた支援

《 概要 》

- 在籍児童生徒数は、小学校30名程度、中学校60名程度である。
- 本町では平成11年度より適応指導教室（ふれあい教室）を設置し、個別や小集団での相談・指導により、学校への早期復帰の支援を行っている。
- 令和元年度の受入状況は、小学校児童数名、中学校生徒10名程度となっており、うち1名は町外からの受入であった。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

- 児童生徒が好きな活動へ自主的に取組むことができる指導の内容の充実
- 学校や家庭、関係機関との連携を図った指導方針の共有

相談・支援、取組等の状況

- ・ 児童生徒一人一人の問題を的確に把握するとともにカウンセリングを行い、自己理解を深めさせ、精神的な開放と自立を促し集団生活への適応を図った。
- ・ 教科学習及び工作・絵画・音楽・読書等に対して、自分の立てた計画に基づいて取り組むことにより自立を促した。
- ・ 児童生徒の実態に即して、グループでのゲームや体育的な活動、または勤労生産的な活動等の多様な活動を行うことにより、心の解放を図るとともに対人関係能力の育成を図った。
- ・ 定期的な原籍校の訪問や学級担任との協議、児童生徒の活動の所見による原籍校への月例の報告などにより情報共有を図り、学校復帰に向けた指導方針の共有や交流を図った。
- ・ 家庭訪問や来訪面談の実施により、適応指導教室での取組や指導、家庭での生活習慣等の情報を交換し、保護者とともに不登校解消に向けた方策について連携を図った。
- ・ 専門的見地からの教育相談や助言、資料提供を受けるなど、医療機関や児童相談所等の関係機関と連携を図った。また、地域ボランティア等と連携して、適応指導教室の環境整備や地域における多面的な活動場面の創出等の連携を図った。

《 取組の成果 》

- 適応指導教室における指導や、相談員との連携により、段階的に登校へつながるケースが見られた。
- 適応指導教室の環境整備や地域における多面的な活動の充実を図ることにより、家から出て適応指導教室へ通級できる不登校児童生徒が増えた。
- 近隣町村からの受入を行うことにより、同様の教室を有しない近隣町村の児童生徒の学習機会の確保につながった。

ニーズに応じた学習への対応と学習機会の確保に向けた取組

《 概要 》

- 在籍児童生徒数は十数名である。このうち、新型コロナウイルス感染症拡大による臨時休業明けより学校復帰している児童生徒が半数以上である。また、在籍児童については、町の子育て支援課と情報共有を図っている。
- 本町では平成10年度より適応指導教室を設置し、自立や学校への復帰を目的に、個に応じた教育相談を行うとともに、基本的な生活習慣や学習、集団生活に対する支援を行っている。
- 国のGIGAスクール構想を受け、タブレットを利用して、個々の能力に応じた内容を学習できる機会を設け、学習機会の確保と心理的不安の解消に努めている。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性	相談・支援、取組等の状況
○ 学習機会の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年度当初から新型コロナウイルス感染症による臨時休業が続き、学校再開後も学習活動に自ら取り組めない児童生徒が増加したことから、国の「GIGA スクール構想」に伴い、適応指導教室においてタブレットを5台導入し児童生徒の学習機会を確保するとともに学習活動の定着に努めている。</li> <li>・ 学校の授業進度に合わせた学習対応及び定着が十分ではない単元の復習対応等、個々の様々なニーズに合わせた支援を行っている。</li> </ul>
○ 自主性と自己肯定感の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習ソフト「Qubena」を導入し、児童生徒が個々に応じた学習内容を自ら選択し取り組むよう指導を行ったことにより、達成感が得られ充実した時間を過ごせるようになっている。</li> <li>・ 専用のタブレットを使用して学習を進めることにより、自分の学習内容が他者に知られることがなく、児童生徒が安心して学習に取り組むことができる環境を提供している。</li> <li>・ タブレットを活用することにより、児童生徒が自主的に家庭学習に取り組めるようにしている。</li> </ul>

《 取組の成果 》

- 通級当初は決められた曜日の通級ができない児童生徒がいたが、タブレット学習導入後は休まず通級し、学習できるようになった。
- タブレットを導入することで、家庭学習が定着していない児童生徒が、自宅で無料の学習アプリを利用し家庭学習に自主的に取り組めるようになった。
- タブレットを活用することにより、自宅で取り組んだ内容をプリントアウトするなど周辺機器を駆使するスキルが身に付くとともに、自己肯定感が向上した。

子どものニーズに応じた足寄町学校適応指導教室「生き生きクラブ」

《 概要 》

- 平成11年度より適応指導教室を設置し、不登校の児童生徒の心の中の学校に対する拒否感の払拭を目的とした支援を行っている。
- 平成18年度から令和元年度までは、適応指導教室における児童生徒の受け入れはなかったが、学校と連携を図りながら不登校児童生徒や保護者との面談等を行っていた。
- 不登校児童生徒の個々の状態に応じた相談・支援を行うとともに、基本的な生活習慣や学習、集団活動についての指導・援助を行い、自立や学校復帰を目指している。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

- 指導教室専任指導員と児童生徒間の信頼関係を築く中で、生活の立て直しを図り、心の開放を促す。
- 家庭や原籍校・関係機関等との連携を図りながら、学校復帰への意欲が高まるよう指導・援助に努める。

相談・支援、取組等の状況

- ・ 「誉める・励ます」を基本に、児童生徒の自己有用感が高まる声掛けなどにより、児童生徒の気持ちが開放される雰囲気づくりに努め、指導に当たっている。
- ・ 指導教室専任指導員が児童生徒の悩みを傾聴し、共に考えながら解消を図っている。
- ・ 基礎・基本の定着を図り、学校への復帰に向けた自信の回復を目指している。
- ・ 個々のもつ特性を見極めながら、その伸長を図るため、積極的に手立てを講じている。
- ・ 児童生徒との対話を通じて学校教育の大切さ、集団における人間関係の必要性についての理解を図っている。
- ・ 学校との連携を密にし、児童生徒の現状について共通理解を図っている。
- ・ 関係機関の協力を得ながら、不登校児童生徒が積極的に利用することができるよう、周知を図っている。
- ・ 保護者の協力を得ながら生活習慣の改善を図っている。

《 取組の成果 》

- 定期的に学校を訪問し、教職員と打合せをすることにより、不登校児童生徒及び不登校傾向のある児童生徒についての支援体制の確認をし、適切な対応を行うことができた。
- 指導教室専任指導員が学校に訪問して不登校児童生徒及びその保護者と教育相談を行うことにより、家庭での過ごし方や学習状況などの現状について把握し、必要に応じて学校と連携して支援を行うことができた。
- 不登校児童生徒及びその保護者に適応指導教室についての説明を行うことにより、学習機会の確保に向けて考える機会をつくることができた。

## 学習支援を通じた自己肯定感の育成

### 《概要》

- 中学校第3学年。登校に対する不安感が強く、令和元年7月から不登校傾向になり、当該生徒と保護者が相談に訪れた。
- 自己肯定感を高め、主体的に学習に取り組める支援を充実させることを目指した。
- 教科担当教諭等と連携しながら、学習の機会と質の保障を図り、効果的な学習方法を定着させるとともに、目標を明確にした計画的な学習と自己の成長を実感できる振り返りを充実させる取組を行った。

### 《相談・支援等の実際》

#### 目標・方向性

- 学習の機会と質の保障

- 自己肯定感を高め、主体的に学習に取り組む支援の充実

#### 相談・支援、取組等の状況

- ・ 当該生徒は、相談員、指導主事との面談後、当該生徒の意思で通室を開始し、ほぼ毎日、2時間程度、当教室へ継続的に通っている。
- ・ 当該生徒と保護者に対し、当該生徒が学校に登校したくなった時は、いつでも登校することが可能であり、それまで当教室を有効に活用してほしいことを伝えた。
- ・ 当該生徒の学習に対する努力が自信の高まりや学力の定着につながるとともに、自己肯定感を高めることができるよう教科担当教諭等と連携を図り、各教科の効果的な学習方法等についてアドバイスした。
- ・ 当該生徒は中学校第1、2学年時は登校していたことから、学習内容は当該生徒の判断に任せ、目標をもって計画的に学習を進めるよう、励ました。
- ・ 当該生徒は、テスト等で思うような結果が出ずショックを受けることもあったが、教科担当教諭等と連携し、学習への取組を振り返りできるようになったことを認め、本人の努力を価値付けた。
- ・ 今のひたむきな学習への取組や意欲を認め、高校進学への目標をもたせ、将来の進路について考えを深めるよう助言した。

### 《取組の成果》

- 当該生徒は、通室当初、十分な睡眠時間が取れず、「疲れやすい」と訴えることがあったが、通室の継続から自信が高まったことにより、不安感や睡眠不足が解消される様子がみられた。
- 当該生徒は、学習を継続し、できることや分かることが増えたことにより、気持ちが前向きになり、自己肯定感が高まり、相手の目を見て話したり、質問したりすることが増えた。
- 当該生徒は、「将来、このような仕事をしてみたい」と考えるようになり、高校進学に対する意欲の高まりがみられた。

## 関係機関との連携による支援の充実

### 《 概要 》

- 当該児童は母親と共に転居し、現在の小学校へ転校してきた。数日間登校したが、学級の友だちとなじめず不登校となり、学校の紹介で適応指導教室へ通級することになった。
- 学校や関係機関と連携し、当該児童や保護者の状況を把握するとともに、家庭への支援、良好な人間関係を築くための支援、ICT機器を活用した学習支援を行うことを計画した。
- 当該児童の状況等を学校や関係機関と情報を共有し、家庭訪問等の支援を行った。行事やSNSを通して人と関わる機会を増やした。オンラインで双方向の学習支援を行った。

### 《 相談・支援等の実際 》

#### 目標・方向性

○学校や関係機関との連携

○良好な人間関係の構築

○ICTを活用した学習支援

#### 相談・支援、取組等の状況

- ・ 学校から当該児童の母親へ連絡を取れないことが多いため、適応指導教室が間に入り、母親と連絡を取り合うようにした。
- ・ 当該児童の母親に対する支援の充実を図るため、学校、福祉課子育て相談室、教育委員会等の関係機関が情報を共有し、家庭訪問などを行った。
- ・ 通級する児童生徒が人と関わりを深めることができるようにするため、誕生日会など、共同して取り組める行事を行った。
- ・ 当該児童が人との関わりに消極的であったので、職員のサポートの下、LINEグループでのやり取りを通して、人と関わる機会を増やした。
- ・ 適応指導教室と福祉課子育て相談室にWi-Fiを設置し、タブレットを1人1台貸し出すなど、ICT環境を整備した。
- ・ 新型コロナウイルス感染症対策による臨時休業や悪天候等で通級できない場合でも、オンラインで適応指導教室と双方向の学習や相談を行った。

### 《 取組の成果 》

- 当該児童・保護者の個人情報等に配慮しながら、情報の共有と連携に取り組むことで、関係機関が協力しながら、適切な支援に努めることができた。
- 不登校児童生徒が行事を通じた共同作業やLINEグループでのトークをすることで、人とつながる経験を積み重ね、積極的に人と関わろうとする姿が見られた。
- ICT環境が整備されたことにより、学習の方法や相談の形態が増え、支援の幅が広がるとともに、他の通級している児童生徒の意欲の向上につながった。

## 関係機関との連携と学校復帰に向けた学習支援

### 《 概要 》

- 本町において、不登校あるいは不登校傾向のある児童生徒の割合は中学生が最も高いという実態を踏まえ、各学校、福祉課、教育委員会と連携し、教育環境の支援を展開した。
- 学校や関係機関と連携し、児童生徒が自分を振り返る、基本的な生活習慣を改善する、基礎学力を身に付けるなど、自立を支援し社会に適応できる児童生徒を育てることを目標とした。
- 児童生徒の実態に応じて弾力的な支援の計画を立て、スポーツや読書などの自由活動、栽培などの体験活動、個別の教科学習や相談などの学習活動に取り組んだ。

### 《 相談・支援等の実際 》

#### 目標・方向性

○教育委員会を中心とした関係機関の連携

○児童生徒への学習支援

○通級を通じた生活習慣の改善

#### 相談・支援、取組等の状況

- ・ 不登校あるいは不登校傾向のある児童生徒についての情報は、各学校から「不登校解消対策個表」が教育委員会に提出され、教育委員会は、教育支援センター、スクールソーシャルワーカーなどの関係機関や学校と情報を共有し、児童生徒の状況に応じて個別の支援を行った。
- ・ 適応指導教室に通級している児童生徒の不登校の主な要因の一つが「学業の不振」であるため、学校の担当者、適応指導教室専門員、保護者、当該児童生徒の4者で協議し、児童生徒の意思に沿いながら、支援方法を決定し、個別の学習支援を行った。
- ・ 教育支援センターに通級し、スポーツや体験活動等で体を動かしたり、個別の学習を行ったりすることを通して、人との関わりを増やしたり、生活習慣の改善につなげたりした。
- ・ 通級日数が少ない児童生徒に対し、定期的に教育支援センターの活動を紹介するお便りを送付し、通級を促した。

### 《 取組の成果 》

- 児童生徒に合わせた個別の学習を行うことで、学習内容の理解が深まるとともに、自己肯定感が高まり、学校復帰につながった。
- 教育支援センターに通級し、スポーツや体験活動で体を動かすことで、生活習慣の改善を図ることができた。
- 児童生徒は、教育支援センターへの通級を通して家庭だけだった生活範囲が広がり、人とつながる機会が増え、学級担任との信頼関係が構築され、学校復帰につながった。

## 望ましい生活習慣の定着と学校との連携

### 《 概要 》

- 当該児童は前年度から生活習慣の乱れによる不登校傾向が見られ、令和2年2月の新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休校以降から不登校となった。
- 当該児童の望ましい生活習慣の定着を図るとともに、学校と連携した支援を実施することで、不安を解消し、学校復帰を促した。
- 短い時間から通級を始め、生活習慣の改善を図るとともに、学校の図書室を利用したり学校から課題の提供を受けたりするなど、学校と連携して学校復帰に向けた支援を行った。

### 《 相談・支援等の実際 》

#### 目標・方向性

○望ましい生活習慣の定着

○学校と連携した支援

#### 相談・支援、取組等の状況

- ・ 当該児童と職員と一緒に花や野菜の世話をするといった体を動かす体験活動などを設定し、当該児童のペースに合わせて、短い時間（1日30分間）から通級を始めた。
- ・ 最初は通級する時刻が定まらず、当該児童のペースで通級していたが、生活習慣が改善されてくると、予定時刻に通級できるようになった。
- ・ 通級開始から2週間後には、当該児童の要望で、1日30分間の活動時間を1時間に延ばすことができた。
- ・ 通級開始から2週間経ち生活習慣が改善され始めた頃、学校からの働きかけに当該児童が応え、教育支援センターだけでなく、学校の図書室で活動するようになった。
- ・ 当該児童は、図書室を利用するうちに他の活動への意欲が高まり、学校のクラブ活動に参加した。
- ・ 教育支援センターでは、学校から出された課題に取り組み、学校復帰への自信をもてるようにした。

### 《 取組の成果 》

- 通級時間を1日30分と短い時間から始め、児童の思いや願いに寄り添った支援を行うことで、通級時間が延び、生活習慣の改善が図られてきた。
- 教育支援センターの職員が、当該児童と一緒に花や野菜を育てるなど、信頼関係を構築することで、当該児童は「自分の居場所がある」という安心感をもつことができた。
- 教育支援センターと学校が連携して当該児童の支援に取り組んだことで、図書室での活動から他の活動へ意欲が高まり、学校復帰への自信につながった。